
〈会員寄稿〉 ―下水文化への思い―

「下水」の語源探索

稲場 紀久雄

今から30数年前、私が40歳代前半の頃、「下水」と「文化」という二つの言葉を結び合せ、「下水文化」と言う言葉の向こうに広がる「下水」の語源探索沃野の存在に気付いた。その時から「下水文化」という言葉は、私の側に常にあった。

私は、「下水」という言葉の語源探索を始めた。語源を調べた先人は、柳田国男ただ一人。柳田は、「下水」とは「ゲスの井」であるとした。「ゲス」は「人糞尿」、「井」は「溜める場所」の謂いで、いねば「肥溜め」。

私は、この説に対して「下水」とは「ケ（穢）の水」であるという仮説を立てた。古代神道は、「大払いの祝詞」にあるように「ケ（穢）のハレ（晴れ）への再生」を願う。つまり「浄化」である。私は、この二つの仮説が両立する所に真の「下水文化」が存在するように思う。私は、その後も思索を続け、「水循環文化」にたどり着き、今もその在り方を探索している。

これからも「下水文化研究」

栗田 彰

江戸の町の下水道がどうなっていたかということについて、調べられようとしていた方とめぐり逢えたことが、私の「江戸下水探究」のはじまりでした。

「江戸の町の下水」を探るのに、どこから手をつけたら良いのか、サッパリわからなかったの
で、ともかく、「江戸の町の下水」について書かれたものを見付けると片っ端から記録しておき
ました。そうこうしているうちに、『江戸川柳』が江戸風俗の宝庫といわれていることを知り、
『はいふうやなぎだるぜんしゅう 俳風柳多留全集』から「下水」に関係する句を拾い集めました。これを基に『川柳・江戸下水〈下
水文化叢書第3号〉』が、そして『江戸町触集成』から下水に関する「まちぶれ 町触」を拾い集め、『江戸下
水の町触〈下水文化叢書第9号〉』として日本下水文化研究会から刊行されました。

その他、地誌『ごふないびこう 御府内備考』や日本橋・銀座近辺の『こけんえず 沽券絵図』などにも「江戸下水」が具体的
に記されていることも知りました。いまは、『えどめいしよずえ 江戸名所図会』から、江戸の町の下水がどのように
描かれているのかをポツポツ探っています。私の「下水文化研究」です。

下水文化への思い

家庭紙史研究家 関野 勉

僕の研究テーマは「トイレットロールの歴史」を明らかにする事でした。当初は「日本トイレ協会」に入会、そこで“渡辺健”さんを知り、1997年頃に日本下水文化研究会に入会したと記憶しています。20年以上前の話です。トイレットペーパー（ちり紙）の事は日本では日常使用していたので、トイレットロールに比し特段の技術は必要ありません。

下水文化ではバルトン・デレーケ・玉川上水の事や、各国の上下水道事情を勉強させて頂きました。そして「日本下水道史」なども読みました。

下水処理場（現在の水処理センター）にて、紙が下水汚泥処理に役立っている事も知りました。ビル・家庭のトイレで使用された紙が糞便と共に下水道の中で、悪さ（溶けない・又導管に張り付く等）してなければ、水処理センターに行き着き、処理された後は影も形も無くなって役目を終えます。足りない所では“紙粉”を加えている事も知りました。

現在、全世界にて新聞用紙の生産量が2017年にて2400万トン弱と減産、一方で衛生用紙は3600万トン強と各国共増産になっております。段ボール原紙等と共に増産になっている衛生用紙は、将来5000万トンに達するのではとの予想もあります。全世界で35億人が使用していると思われるトイレットロールの最初の生産者は、Seth Wheeler氏のA.P.W.Paper Co.である事も分かりました。唯当初wrapping paperが、何が切っ掛けでトイレットロールの生産に行ったのかがいまだ疑問です。

体験談を聴く会を100回余開催して

地田 修一

東京都下水道局に勤務していたとき、砂町水再生センターでかつて実施されていた汲取り屎尿の処理並びに屎尿汚泥のコンポスト化に関して聞き書きをする機会がありました。平成10年、日本下水文化研究会に入会してからは、この経験を活かして、分科会「屎尿・下水研究会」を拠点に、現場で汗を流してご苦労された方々に、それぞれの実務に根ざした思い出話をしてもらい集まりを都合100回余開き、適宜、その講話内容を業界誌に発表してきました。幸いにもこれらの記事が幾つかの出版社の目に留まり、一般読者にも情報を発信（3冊の成書を刊行）することができました。私自身は下水道技術の開発・維持管理の専門家ですが、会での活動（9年間の運営委員や20年間の分科会幹事）を通して、様々な職域（行政、メーカー、コンサルタント、教育、マスコミ）の会員と交流を深めることができ、現役を終えた後の人生に幅と厚みを加えることができました。

「下水文化への思い」

早稲田大学総合研究機構リンアトラス研究所 招聘研究員

大阪産業大学大学院工学研究科都市創造工学専攻 講師

三品 文雄

これまで、明治以降の下水道の進展やその文化思想、屎尿や生活排水に関する考え方の変遷、日本の古代、中世、近世、現代にいたる下水道の役割と失敗。海外での古代文明やヨーロッパ中世の下水道に対する思いや技術を学ばせて頂きました。

時には藤原京に出かけたりして、日本人の知恵の素晴らしさに感銘しました。下水道を長らくやって来た一人として、これから何をすべきかを熱く議論させて頂きました。

しかし、まだ疑問点として、古代下水道はどうして中世には廃れたのか。下水道の役割は今後も変わらないのか。人口減少社会の中で、下水道の運営はどうするのか。課題はまだまだ尽きないと考えています。

下水文化研究会のこれまでの蓄積を活かす必要があるように思います。